

## 転校生

並木 せつ子

小学2年の夏休みに転校をした。引っ越したのは、鉄道の乗換駅がある大きな町で、しかも駅の近くにある学校だったので、以前の学校よりも町場の雰囲気こそなえていた。初めて新しい学校に行ったのは夏休みの登校日だった。その日のことはほとんど覚えていないのに、誰もいなくなった教室で、担任の先生と母と私が座っている光景と、その時かわされた先生と母とのあいだのやりとりだけが、妙にはっきりと記憶に残っている。

そのやりとりとは——先生が「この学校では音楽の時間に木琴を使っていて、みんなは持ちこびでできる木琴を各自購入していますが、家に楽器があればそれでもいいですよ」と言い、母が即座に「あります」と答えた——というもの。先生は、前の学校で使っていた楽器があるなら、それがかまわないと思ったのだろう。しかし前の学校では楽器を使っていなかった。母の頭にあったのは、私が小さいころ使っていたおもちゃの卓上ピアノだったのだ。先生にしてみれば卓上ピアノは予想外だったにちがいない。それでも、この申し出はすんなり受け入れられた。

卓上ピアノは赤色で、グランドピアノの形こそしていたが、幅も奥行も20センチくらい、たぶん2オクターブしかなかっただろう。キズついて塗料のはげているところには、兄が赤い絵の具をぬって目立たなくしてくれた。足をはずして風呂敷につつむと、まるで赤飯を入れた重箱のようだった。こうして音楽の授業のある日には、持ちにくい重箱のような包みをさげて通学することになった。

それでも晴れの日がいい。問題は雨の日だった。傘をさして重箱の包みをぬらさないように持つのはけっこう難しい。学校につくころには、

風呂敷はびっしょりぬれていた。特にいやだったのは、塗料のはげたところにぬった絵の具がとけてきて、手が真っ赤になることだった。雨の日、赤くなった手を見るときだけは、卓上ピアノをうとましく思ったものである。

子どもの本の世界では、転校生がいろいろな形で登場する。典型的なのはいじめや友情をテーマにしたもの。最初は仲間はずれにされるが、何らかのきっかけや努力で仲良くなる。転校生は、帰国子女、美人、勉強やスポーツが得意、反対に勉強ができないなど、いろいろである。転校回数多さでは（私の知っている中では）『まっぴんぱん、転校生！』の19回、『オレさすらいの転校生』の10回が上位だった。最近『ひとりひとりのやさしさ』『わたしのいもうと』のように、イジメに重点がおかれ、問題解決に至らないまま終わる物語も目立つようになった。予定調和でないのはいいが、読後も気持ちは晴れない。

もう一つは転校生が異界や魔界の者というパターン。突然やってくる謎の存在はミステリーやファンタジーにうってつけである。転校生は魔女、魔法使い、魔術師、忍び、吸血鬼……など、秘密や不思議や謎にあふれている。そういえば『風の又三郎』も転校生で、不思議な存在だった。『たかこ』は十二単を着た平安時代のお姫さまのような転校生。音楽の時間にはリコーダーの代わりに琵琶をかきならす。これに比べれば、私の卓上ピアノなどかわいいものである。

さて、私自身はといえば、卓上ピアノが運びにくいとか、手が赤くなるとかを煩わしく思うことはあっても、一人だけ違う楽器を使うことに引け目を感じることはなかった。そもそも違和感を覚えていなかったのである。新しい楽器を買わずにすますましい家の、転校生である私。にもかかわらず、おもちゃの卓上ピアノの一件で、ことさら貧しさを痛感させられたり、仲間はずれにされたりということにはなかった。今思えば、先生も生徒もおおらかな時代だった。（なみき せつこ）

## 公立図書館の児童サービスについて～図書館勤務で出会ってきたこと～ 2

全国の公共図書館には児童室や子ども図書館があり、地域の子どもたちへのサービスもさかんですが、それがあたりまえでない時代がありました。前回からお話をうかがっている、みずもとひろはさんも、地域の子どもたちのために、さまざまな新しい挑戦を続けていらっしゃいました。今回は、図書館に子どもがあふれていた頃のお話からうかがいます。

図書館に子どもがあふれていました

ひろはさん：最初に入った図書館が1980年開館の新しい図書館だったのです。外へ出ていくことを嫌がらない人が多かったので、私も何かの調査だとか施設見学だとか、外へよく出させてもらいました。

図書館の屋外の庭でおはなし会をさせてもらったのも、いい体験でした。その頃は、もっと開放的なところでやった方が楽しいんじゃないかなと思っていましたので。館内でもやりましたよ。カーペットが敷いてあるスペースが、子どもでいっぱいになりました。

また、その館では、毎年夏休みに「戦争展」という展示をしていました。私の担当時には、戦時下の子どもたちの暮らしはどうだったのかということに光をあてました。疎開先で寮母さんをされて、その頃の子どもたちが描いた絵をたくさん持っているという方に巡り合い、その絵を展示させてもらったこともあります。最初の職場でいろいろ自由にさせてもらえて、恵まれていましたね。

みずもとさん：きっと上司の方々も、うるさくなかったのよね。今は、お役所的な視点で、がんにがらめになっている方が、図書館には少なくないですから。何かやろうとすると、お伺いをたてて、企画書を書いて上の方々に許可をもらってと、大変ですよ。

児童図書館員養成講座を受けてから

ひろはさん：日本図書館協会の養成講座を受けてみて、児童サービスについて勉強するのとはしないのでは、やっぱり違うなあと思いました。おはなし会なども、子どもたちを楽しませよう

という思いがありましたけれど、勉強して、本といかに出合ってもらおうかという気持ちで取り組むようになりました。

3館目の図書館の時は、養成講座を受けた人が多く、夏休みは児童書の棚がガラガラになってしまうような館でもありましたので、児童サービスは大事だという思いを職員が共有できました。月に1回だったおはなし会を2回にする際に、2回目は「おひざのおはなし会」という親子参加の会にしてみようかとなったのです。

先行していた近隣の図書館のおひざにだっこのおはなし会を見に行くと、参加者を大勢入れ過ぎて、図書館員が身振り手振りで踊るように本を読んでいて、驚きました。ほかの図書館で「わらべ歌の会」を見て、これだと思い、講師の方にいろいろ教えていただいて始めました。すると申し込みが殺到し、1回15組に限定して1日2回開催しました。1回目と2回目で子どもたちの反応がまるで違うし、とても勉強になりました。ちゃんと本を紹介して、わらべ歌も出来たので、よかったと思います。

盛況だったので、月3回目として、地域で活動している育児グループにお話を聴いてもらうという「グループおはなし会」を企画しました。0歳1歳の頃から、定期的集まって活動している育児サークルの子どもたちは、普段から一緒にいるので、小さな子も大きな子も一緒になって読み聞かせを楽しむのです。とても密度が濃い時間だと思いました。

いろいろなことを経験できたこの図書館での12年間が、私なりの「児童サービス」への取り組みのベースになっている気がしますね。

### 子どもたちとじっくりつきあえていた頃

**ひろはさん**：その館が開館したばかりの頃は、カウンターにいと子どもたちが寄ってきたりしていました。夏休みにカウンターで作業している私の周りで、子どもたちが小さな「本」を作ってくれたこともあります。私の似顔絵も描いてくれて、今でも宝物です。子どもとしっかり触れ合える関係が持てたのは、その図書館が最後で、ちょっと残念ですね。

**みずもさん**：毎日通って来る子がいたよね。今は、学校帰りに寄っちゃダメって指導されているのかもしれないけれど。

**ひろはさん**：今の子は忙しいでしょうね。

親子おはなし会でも、印象に残っている子がいますよ。3歳になったばかりとは思えないしっかりした体格の子でしたが、みんなでわらべ歌を歌って手遊びするときに、突っ立っているだけで何もやらないんです。一人だけ何もやらずに、お母さんも困っていた様子でしたが、それでも毎回来ていたのです。ある時、日曜日にその子がお父さんと図書館へ来まして。「今日はお父さんと来たの？」って声をかけたら、びっくりした様子で「2階から来たの？」って聞いてきたのです。おはなし会がいつも2階であるから「2階の人」と私は思われていたようです。その時以来、人一倍元気にわらべ歌も歌うようになって。ずっと通ってくれて、引越した時はあいさつにまで来てくれました。

その次の図書館では、おはなし会に毎回来てくれるような子は少なくなってしまって、職員の方も全員でやるうってというのが浸透して、担当がまわってくるのが少なくなってしまい、会の雰囲気や参加者のことがわからなくなってしまいましたね。担当者3人だけで回っていた前任館は大変でしたが、密度が濃くて参加者のことなどもよく見えました。

**みずもさん**：子どもにとっても、いつも同じ人が来てくれる方がいいのよね。なじみのある人がいてくれるというのは、子どもにとって安心だと思います。

昔は司書が自治体の成人式のお手伝いに借り出されたりしていたのです。成人式に行くと、「あ、図書館のお姉さんだ」などと皆が覚えていてくれて。「わあ、大きくなったねえ」なんていう交流が出来て、嬉しかったですね。

### 図書館から本を届けに

**みずもさん**：80年代後半あたりから、段々子どもたちが忙しくなってきて、親が子どものために本を借りに来るようになってきたのです。図書館に来る子が減って、「子どもが本に出会う機会が減ってきているね、学校へ本を届けようか」と、3人の職員で話しました。学校には図書室があるけれど、図書室に行くのは好きな子。図書室にも行かないような子どもたちに、どうにかして本を届けたいと、学校の各クラスに学級文庫を置きませんかのご案内したのです。いざ希望を募ったら、町中の全小学校全学級から申し込みがありまして。

**ひろはさん**：すごい。本は足りたのですか？

**みずもさん**：県立の図書館に話したら、団体貸出の許可があり、みんなでオリコン何十箱という子どもの本を借りにいきました。その当時は町に小学校が5校で、のちに6校に増えたのですけれども、1回に1クラス100冊くらいを箱に詰めて貸し出しました。

その後は、箱詰めが大変だからと移動図書館で行くことになり、各小学校の低学年・中学年・高学年とそれぞれで各学期に1回行きました。高学年になると先生や生徒が「ブックトラック作りました～」などと、学級文庫の棚を飾りつけてガラガラ転がして出てきてくれて。今は生徒の数も減って、学年に1クラスなんていう学校も多くなってしまいました。学校を訪問するのは今も続いています。

財政の方からなどは、移動図書館は効率悪いからもうやめろみたいなことを言われているのですが、学童に貸し出しに行くなど、違うところでも役に立っているからもっと続けてほしいです。 (次号に続きます)